Osaka University Knowledge Archive

Title	“了”はなぜ<もうすぐ変化>を表せるのか？ : 認識的アプローチ
Author(s)	劉, 綺紋
Citation	中国研究集刊. 2005, 39, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61197
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊 雨号（総三十九号）平成十七年十二月 1—22頁

“了”はなぜ〈もうすぐ変化〉を表せるのか？
——認知的アプローチ——

劉 綺 紋

1. はじめに

“吃饭了！”という文は多義的である。例えば人と出会って、“吃饭了吗？”と挨拶された際の答えとして使うと、「もうご飯を食べ（終わっ）た！」という〈完了〉の意味を表す。また、相手が食事しているのを見て使った場合、「お食事中ですね（ご飯を食べ始めたね）！」という〈実現（開始)〉の意味を表す。そして、「ご飯ですよ！」と呼び掛ける際に使うと、この“了”は〈もうすぐ変化〉を表す。

従来、文末の“了”は〈変化〉（すなわち実現や新事態の発生）を表すとされてきた。実は、“了”が〈完了〉も〈実現〉も表せるのは、それらがみな〈変化〉の意味効果だからである（劉綺紋2005a;印刷中)。では、“了”はなぜ〈もうすぐ変化〉をも表せるのだろうか。この問題について、従来の研究ではそれを追究してこなかった。本稿では、認知的観点からこの点を考察する。

2. 〈もうすぐ変化〉の“了”の操作

“了”[le]は、文の中で動詞直後と文末という２つの位置に置くことができる。また、アスペクト機能もモダリティ機能も担うことがある。殆どの先行研究は、“了”を２つの異なるマーカーに分け、それぞれ異なる機能を持つとしている。

この点について、筆者は春木･劉(2003)を受け継ぎ、次のように考える。“了”は、その位置が動詞直後でも文末でも、また、その機能がアスペクトでもモダリティでも、いずれも〈変化〉というアスペクト操作をプロトタイ

プとし、〈限界達成〉という操作をスキーマ（共通性）としている。つまり、いずれの“了”も同一のマーカーなのである（劉綺紋2004;2005a;2005b;印刷中）(注1)。

それでは、本稿で取りあげる〈もうすぐ変化〉の“了”は、どのような操作を表しているのだろうか。実は、この“了”も〈変化〉、具体的には、時間軸における開始点や終結点という意味での限界の〈限界達成〉というアスペクト操作を表しているのである。

しかし通常、〈変化〉の“了”で述べるということは、その事態にすでに変化が起きたこと、すなわち変化後（〈完了〉や〈実現〉）を表すことになる。例えば、“电脑故障了。”（パソコンが故障した。）、“我明白了。”（分かった。）など、いずれもそうである。一方、〈もうすぐ変化〉の“了”で述べるということは、文字通りまだ変化が起きていないこと、すなわち変化前を表すことになる。では、どちらも〈変化〉の操作が行われているにもかかわらず、このような相違が生じるのは、なぜだろうか。

この点を考えるに当たって、フランス語の半過去のテンス・アスペクト・モダリティの関連性について考察している春木(1991;1992)で展開されたモデルに基づいて考えたい。春木(1991;1992)は、Fauconnierのメンタルスペース理論を拠り所としながらも、のちのCutrer(1994)やFauconnier(1997)が提示するメンタルスペースの時制論とは大きく趣を異にする、興味深いモデルを提案している。そのモデルとは、半過去が使われると発話空間とは別の認識空間が構築され、その認識空間への視点の移動が起こる、というものである。発話空間とは別の認識空間を構築するというこの考え方は、“了”で〈変化〉の操作が行われることを示しつつも、最終的に〈もうすぐ変化〉を表す現象の解明に、大きな示唆を与えてくれる。

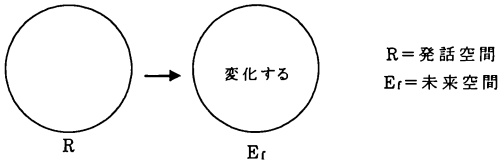
3. “要～了”の場合

さて、〈もうすぐ変化〉を表すのに、“吃饭了”のような“了”だけの場合以外に、“了”が“要”・“快”などの助動詞・副詞と共起している場合も多い。例えば、“他要回家了。”（彼はもうすぐ帰ります。）、“快过年了。”（もうすぐお正月です。）などがそうである。この第３節では、まず後者について“要～了”を例として考察し、続く第４節では、“了”だけの場合を考察する。

3.1. “要～了”の認知的操作

“要～了”が〈もうすぐ変化〉を表す際に、どのような認知的操作が働いているのだろうか。この点について、図1で説明しよう。

図 1. “要～了”の操作



ここでは、春木(1991;1992)にならい、話し手が発話を行っている場を発話空間とし、Rと表記する。それは、発話空間が話し手にとっての現実(réalité)（すなわち現実世界）だからである。「話し手にとっての現実」ということは、それはあくまでも話し手の認識に基づいて捉えた現実なのであり、決して絶対的意味での現実ではない（Fauconnier 1994[2]）。発話空間は、話し手の認識空間の１つなのである。ここでは、「人間は自分を発話するものとして位置づけ、そうして発話主体である自分、そして発話の出来事の時間である現在を出発点にして、自分自身の存在を組み込んだ関係の網を構築していく」のである（ドルヌ・小林2005:13)。

また、未来空間とは、発話空間を出発点とする話し手が、その認識に基づいて捉えた未来である。これもやはり、話し手の認識空間の１つであり、厳密には発話空間という話し手の認識空間を前提とした認識空間なのである。ここでは、未来空間をE_f (espace futur)と表記する。

そして、“要～了”を用いて述べると、次のような認知的操作が働く。すなわち、まず“要”の使用により、発話空間を出発点とし、未来空間を構築し、その未来空間に事態（物語）を位置づける、という操作が行われたことを表す。次に、“了”の使用により、その未来空間において〈変化〉の操作が行われたことを表す。その結果、“要～了”は未来における事態の変化を表すことが可能となる。これが、“要～了”の“了”によって、一方でその

他のアスペクトの“了”と同様に〈変化〉の操作を表しつつ、もう一方で、変化後ではなく、変化前という意味効果が得られる理由である。

では、“要”が未来空間を構築する引き金（trigger）になりうるのは、なぜだろうか。また、この“了”の操作は、他でもなく〈変化〉である、と言える理由は何だろうか。3.2節と3.3節とでは、この２点についてそれぞれ考察する。

3.2. “要”について

“要”は、未来の事態を述べることができる。例えば、次の例文がそうである。

(1) 这个会议要开到月底。（この会議は月末までかかる。）

“要”のこのような〈未来〉の意味は、何に由来するのだろうか。

“要”[yào]は多義的であり、共時的観点からすると、“要”のさまざまな意味の中で、〈欲望〉を意味するものが多く、かつ、最も顕著性が高いと言えよう。例えば、(2)の諸例文を見てみる。

(2) a. 我要钱！（僕は金が欲しい！）
b. 孩子要我们来关心。（子供は私たちが関心を持つことを必要とする。）
c. 工场要工人提前上班。（工場は出勤時間を繰り上げるよう労働者に要求した。）
d. 我跟老王要了两张票。（私は王さんに切符を２枚もらった。）
e. 我要一杯木瓜牛奶。（パパイヤミルクを１つください。）
f. 他要老师给他开个介绍信。（彼は先生に紹介状を書いてくれと頼んだ。）
g. 我要学法语。（私はフランス語を学びたい。）
h. 他们全家要移民到加拿大。（彼ら一家はカナダに移民するつもりだ。）

これらの“要”はそれぞれ、(a)欲しい・(b)必要とする・(c)要求する・(d)もらう・(e)注文する・(f)頼む・(g)～したい・(h)～するつもりだ、を表している。つまり、その対象が具体的であれ抽象的であれ、これらの“要”はいずれも何らかの意味での主語（行為者agent）が〈欲する〉ということを表している。〈欲望〉は、“要”のプロトタイプだと言える。

そして、欲望を表すマーカーは、未来をも表しやすい。それは、欲すると

いうことを時間軸上に置くと、現在実現していないことが未来において実現してほしいということを表すことになるからである。かくして、発話空間での欲望はしばしば未来の事態へと繋がり、未来空間の構築を促すのである(注2)。このことは、中国語以外のさまざまな言語にも見られる（Bybee & Pagliuca 1987、Bybee *et al.* 1994)。例えば、英語では(3a)のwillは欲望を表し、(3b)のwillは未来を表している。

(3) a. I will go to the dance! You can't stop me!（私はどうしてもダンスに行くんだ！あなたは私を阻止できない！）

b. For once it is attached, it will never come off.（Bybee & Pagliuca 1987）（これは一旦くっつくと、はがれないからです。）

欲望のマーカーが未来をも表すことが多くの言語で観察されるのは、私たち人間の上記のような認知的プロセスが働いているからだと考えられる。

3.3. “要”と“要～了”

では、“要～了”の“了”が表しているのは〈変化〉というアスペクト操作である、と言える理由は何だろうか。この点について、“要～了”と“要”との比較を通して分析してみよう。

“要”と“要～了”とでは、２点の相違が観察される。まず１点目は、“要”だけの場合より、“要～了”の方が未来空間を開きやすい、という点である。

(4) a. 借的东西要还。（借りたものは返さなければならない。）

b. 借的东西要还了。（借りたものはもうすぐ返す。）

(4a)では、“要”は「～しなければならない」という義務のみを表している。一方、(4b)のように“了”を付け加えると、「もうすぐ返す」を表すことになり、事態（返すこと）がその開始点へと移行しつつあることを表すことになる。

“要”だけの場合、欲望をプロトタイプ的意味としながら、未来のみならず、義務、仮定、習慣などの意味をも表すことができる。それは、“要”だけの場合は、発話空間における欲望を出発点としながらも、時間軸上における未来空間のみならず、様相空間、仮想空間、習慣空間など、さまざまな種類の認識空間を開くことができるからである。一方、このような“要”に“了”を共起させると、話し手が発話空間で〈欲望〉を働かせて〈変化〉を起こ

そうとすることを表すこととなり、その結果、未来において事態が変化すること、換言すれば、現在においては事態が開始点へと移行しつつあることを表すこととなる。それで、“要”よりも“要～了”の方が、未来空間を開きやすいのである(注3)。

２点目は、“要”に比べて、“要～了”はしばしば断定・念押し・確信や、期待感・失望感など、さまざまなモダリティ的ニュアンスを伴うという点である。例えば、次の２つの文の発話状況を想像してみよう。

(5) a. 明年我要结婚。(来年私は結婚します。)

b. 明年我要结婚了！(来年私は結婚します！)

“要”それ自体が話し手の心的態度を表すモダリティマーカーであるため、この２つの文はいずれも主観的な文だと言える。しかし両者の主観性の程度は異なっている。「来年私が結婚すること」を比較的に客観的に伝えようとする場合、(5a)が使われるのに対し、期待感・失望感や念押し・確信などのニュアンスをも伝えようとする場合は、(5b)が使われるだろう。例えば、(6)がそうである。

(6) a. 太好了！我明年终于要结婚了！(よかった！私は来年ようやく結婚するんだ！)

b. 唉！我明年真的要结婚了！(あぁ、なんてことだ！私は来年本当に結婚するんだ！)

また、次の用例で“了”が使われるのも、期待感を表すためだと考えられる。

(7) 赖夫人接嘴道：“我一直听说钱夫人的盛名，今天晚上总算有耳福要领教了。”(游园惊梦)(賴夫人は続けて言った。「銭夫人のご名声はかねがね伺っていました。今晚ようやくその美声で耳を楽しませることができます」)

では、“了”を“要”と共起させると、以上のようなモダリティのニュアンスを生じさせるのは、なぜだろうか。それは、やはり“了”を用いると、未来空間において変化が起きること、すなわち未来の変化を前提としていることを表すからである。それにより、未来における変化の存在を強く意識させることになり、文脈に応じて、断定・念押し・確信・期待・恐れ・失望といったニュアンスが生じるのである(春木・劉2003:35-36)。

以上、“要”と“要～了”との比較を通して、この“了”が表しているのは他でもなく、〈変化〉というアスペクト操作である、ということについて

述べた。第４節では、“了”だけで〈もうすぐ変化〉を表す場合について考察する。

4. “了”だけの場合

4.1. “了”だけで〈もうすぐ変化〉を表せる発話

では、“了”だけで〈もうすぐ変化〉を表す場合、その“了”によって示されるのは、どのような操作なのだろうか。実は、この“了”は“要～了”の“了”と同様に、やはり〈変化〉というアスペスト操作を示している。

ところが、“要～了”の場合、未来空間を構築する引き金となるマーカー“要”があるのに対し、“了”だけの場合は、そのようなマーカーはない。にもかかわらず、“了”だけでも変化前を表せるのは、なぜだろうか。この点について、“了”だけで変化前を表せる発話タイプの制約を通して分析してみよう。

変化前を表す場合、“要～了”などの形式は特に発話タイプの制約がないのに対し、“了”だけの場合は発話タイプの制約がある。例えば、(8)においては、“要～了”などでも“了”だけでも変化前の解釈ができるが、(9)において変化前の解釈ができるのは、“要～了”などの形式に限られる。

(8) a. {要／快} 吃饭了。(もうすぐご飯を食べる。)
　　b. 吃饭了。(ご飯を食べ(終わっ／始め)た。／(これから) ご飯を食べる。)

(9) a. 灯 {要／快} 灭了。(電灯の明かりがもうすぐ消える。)
　　b. 灯灭了。(電灯の明かりが消えた。)

では、“了”だけで変化前を表せる発話は、一体どのような発話なのだろうか。それは、典型的なタイプとしては事態制御文があり、周辺的なタイプとしては注意喚起文・制御不能文が認められるだろう。以下、これらの発話において“了”だけで変化前を表せる理由を考えたい。

4.1.1. 事態制御文

いわゆる事態制御文とは、意志文・命令文・勧誘文という３種類の発話である。これら３種類の発話は、それぞれの行為者は異なっているものの、いずれも話し手の意志通りに事態を実現させよう、現実世界に働きかけてコントロール（制御）しようとする点で共通している。そのため、これらをまと

めて事態制御文と呼ぶこととする（森山2000）。

中国語の事態制御文の多くは平叙文と同じ形態である。すなわち、意志文か命令文か勧誘文かは、文（sentence文の形態）によって区別できず、文の使用(use)、すなわち発話(utterance)によってしか区別できない(注4)。例えば、次の例文を見てみる。

(10) 吃饭了。a. 意志文：「(私は) ご飯にしよう」
b. 命令文:「ご飯ですよ」、「ご飯を食べなさい」
c. 勧誘文：「(私たちは)ご飯にしよう」
d. 平叙文（現象描写文）:「ご飯を食べた」

このように、中国語の事態制御文と現象描写文とは、通常その形態から区別できない。しかし、共に“了”だけを用いて述べながらも、事態制御文ではその事態は変化前であるのに対し、現象描写文ではその事態は変化後である。では、このような相違は、何に由来するのだろうか。

それは、「話し手（speaker）の意志」というモダリティ的意味の有無に由来するのではないかと推測される。前述のように、事態制御文によって話し手は自分の意志通りに事態を実現させようとする。この場合に、話し手の意志が介在するのである。一方、現象描写文によって話し手は事実に関する情報を記述する。この場合は、話し手の意志が介在しないのである。

この相違は、“了”だけで変化前を表せる発話においては、話し手の意志が介在するということを示唆している。以下において、さらに注意喚起文・制御不能文で検証しよう。

4.1.2. 注意喚起文

ここで言う注意喚起文とは、近接未来に起きると予想する事態を話し手が発話することにより、聞き手の注意を喚起しようとする発話である。

(11) a. （ある人がひどく殴られているのを見て）
打死人了！｛别打了！／大家快来啊！／你快叫警察来！……｝（殺してしまう！｛もうやめろ！／みんな早く来て！／あなたは早くお巡りさんを呼んできて！……｝）
b. （大きい稲妻が走るのを見掛けて）
打雷了！打雷了！｛赶快进屋里去！／别游泳了！／快把耳朵捂住！……｝（雷だ！雷だ！｛早く家の中に入りなさい！／もう泳ぐな！／早く耳を覆って！……｝）

注意喚起文と前述の事態制御文とは、人称や事態の制御可能性に関する制約でその性質を異にする。事態制御文は、基本的に発話空間に参与する話し手（１人称）や聞き手（２人称）を主語に取り(注5)、制御可能の事態にしか用いることができない。一方、注意喚起文は、３人称や非情物をも主語に取ることができ、また、制御不能の事態を用いることもできるのである。

しかし、両者は話し手の意志というモダリティを持つ点で共通している。この点について、前掲の(11)で考えてみる。(11a)では、「殴って殺してしまうこと（事態Ｐ）」を告知し、殴る人や傍観者への注意喚起をしようとすることにより、何らかの事態（事態Ｑ）を実現させようとしている。その事態Ｑはその発話によって明示されておらず、さまざまな可能性がある。例えば、「殴る人が殴らないこと」や「他の人たちに集まってきてもらうこと」や「傍観者にお巡りさんを呼ばせること」などである。また(11b)では、「雷が鳴ること（事態Ｐ）」を告知することにより、やはり何らかの事態Ｑを実現させようとしている。

これらの例文から観察できるように、注意喚起文によって実現させようとする事態（事態Ｑ）は、その発話で述べられる事態（事態Ｐ）とは異なる事態であり、その発話だけでは必ずしも特定できない。一方、事態制御文によって実現させようとする事態は、その発話で述べられる事態と同一の事態（事態Ｐ）であり、その発話だけで特定することができる。しかし、その発話によって、話し手の意志通りに事態を実現させよう、現実世界をコントロールしようとする点で、注意喚起文と事態制御文とはいずれも話し手の意志というモダリティ的意味を持っていると言える。両者はいずれも、事実に関する情報の描写や記述を意図せず、その発話自体がある行動を促したり、その発話を介して何らかの間接的な行動を喚起したりするのであり、言わば「発話行為（speech act)」なのである。より具体的に言えば、事態制御文は「発語内行為（illocutionary act)」であり、注意喚起文は「発語媒介行為(perlocutionary act)」だと言うことができる(Austin 1962; 山梨1986)。

前節からこの節までの事態制御文・注意喚起文に関する分析から、“了”だけで述べる場合に変化前を表すかそれとも変化後を表すかは、話し手の意志の介在の有無によるものだということが分かった。では、話し手の意志の介在の有無によってこのような相違が生じるということは、何を意味しているのだろうか。それは、“了”のアスペクト的意味が本来〈変化〉そのものしか表さず、変化後になるか変化前になるかは、文脈によって決まるものであ

る、ということを意味している。

まず、話し手の意志の介在がない場合、“了”で述べると変化後を表す。それは、この場合、変化が確認されてから、初めて変化が存在することが分かるからである。そこで、〈変化〉の“了”で述べるとそのデフォルトの解釈は変化後となる。つまり、事態が発話空間や過去空間に位置づけられるのである。

一方、話し手の意志の介在がある場合、“了”で述べると変化前を表す。それは、すでに変化が起こってしまった事態は、話し手の意志は介在しようがないからである。話し手の意志で変化を引き起こそうとする事態は、必ず未来にある。そこで、話し手の〈意志〉が介在する発話で〈変化〉の“了”を用いると、意志によって未来空間が開かれ、その未来空間に事態が位置づけられる。さらに、“了”によって未来空間における事態の〈変化〉を表すこととなり、結果的に、発話空間においてはまだ変化前ということになるのである。

第３節の“要”のところで見たように、“要”だけでも未来空間を開くことができるのだが、“要”に〈変化〉を表す“了”を共起させると、いっそう未来空間が開きやすくなる。それも、すでに変化が起こってしまった事態に対しては、行為者は欲望を働かせようがないからであり、行為者が欲望を働かせて変化を起こそうとする事態は、必ず未来にあるからである。

Bybee & Pagliuca (1987)、Bybee *et al.* (1994)は通時的観点からさまざまな言語の未来形を調査した結果、未来形の最も一般的に見られる起源の１つは、行為者志向(agent-oriented)のモダリティの１つである欲望(desire)であり、その文法化の道筋は次のようになるとしている(Bybee *et al.* 1994: 256)。

DESIRE(欲望) ＞ WILLINGNESS(意志) ＞ INTENTION(意図) ＞ PREDICTION(予測)

この文法化の道筋が示唆しているように、欲望・意志・未来（予測）という三者は互いに緊密に関わっている。“要～了”と“了”について言えば、未来空間を構築する引き金となるものは、“要～了”の場合は〈行為者の欲望(agent's desire)〉であり、“了”だけの場合は〈話し手の意志(speaker's willingness)〉である。これは一見異なるように見えるものの、実はその本質は共通している。〈行為者の欲望〉も〈話し手の意志〉も、共にhuman agency（人間の行為者性)、すなわち人間が意識し、その力を働かせて何かの行為

を引き起こそうとするモダリティである点で共通しているのである。そして、このhuman agencyがさらに“了”と組み合わさると、人間の意識・意図によって変化を引き起こそうとすることを表すこととなり、いっそう未来空間が開かれやすくなるのである(注6)。

意志の介在と変化前・変化後とのこのような関係について、さらに以下の制御不能文で確認しよう。

4.1.3. 制御不能文

制御不能文の場合、話し手はそれによって何かの制御可能な事態を自分の意志通りに起こそうとするわけではない。それによって制御不能の事態の発生に関する認識を述べる。そのため、制御不能文を“了”で述べると、通常変化後を表すことになる。

(12) 灯灭了！（電灯の明かりが消えた！）cf. 灯｛要／快｝灭了！

しかし、よくよく観察すれば、制御不能文のうち、“了”だけで変化前を表せるものも僅かながら存在することに気付く。例えば、次の(13)がそうである。

(13) a. （くしゃみが出ると感じた際）
我打喷嚏了！（くしゃみが出る！）
b. （おならが出ると感じた際）
我放屁了！（おならが出る！）

では、(13)の制御不能文と、一般の制御不能文とは、どのような相違があるのだろうか。それは、(13)のような発話が、1)話し手自身の身体経験であること、2)決まって起きる前兆があること、という２つの属性を合わせ持っている、という点である。

まず、１点目について、(13)と次の(14)(15)とを比べて確認しよう。

(14) a. 你打喷嚏了！（くしゃみをしなさい！／あなたはくしゃみをした！）
b. 他打喷嚏了！（彼はくしゃみをした！）
(15) a. 我爱上他了！（私は彼のことが好きになってしまった！）
b. 我听到教会的钟声了。（私は教会の鐘の音が聞こえた。）

(13a)と同様に、(14)も“打喷嚏”という事態を述べているが、しかし(14)は変化前の制御不能文としての解釈はできない。（(14a)は変化前を表す命令文の解釈はできる。）それは、(13a)が話し手自身の経験を述べているの

に対し、(14)はそうではないからである。また、(13)と同様に、(15)も話し手自身の経験を述べているが、しかし(15)は変化前の解釈はできない。それは、(13)が話し手の身体経験を述べているのに対し、(15)は身体経験ではなく、それぞれ心理経験、知覚経験を述べているからである。以上の比較から分かるように、“了”だけで変化前を表せる制御不能文は、話し手自身の身体経験を述べる場合に限られる。

次に、２点目について、(13)と次の(16)とを比べてみる。

(16) a. 我受伤了！（私は怪我した！）

b. 我牙疼了！（私は歯が痛くなった！）

(13)と同様に、(16)も話し手自身の身体経験を述べているが、しかし(16)はふつう変化前の解釈はできない。それは、(16)の事態が通常単発的な事態だと認識されるのに対し、(13)の事態はいずれも時間軸に沿って起きる事態系列のなかの一環だと認識されるからである。すなわち、鼻がむずむずすると、くしゃみが出る。お腹のガスが下腹部の腸壁に衝突すると、おならが出る。これらは、いずれも私たちの経験から分かる事態の系列であり、事態Ｐ（くしゃみが出ること）がすでに時間軸というレールに乗って開始点へと移行しつつあることは、事態Ｑ（鼻がむずむずすること）の発生によって予告される。一方、「怪我する」「歯が痛い」などの事態の発生を予告する、決まって起きる前兆は通常生じない。

では、制御不能文のうち、上記の２つの属性を併せ持つものしか変化前を表せないということは、一体何を意味しているのだろうか。それは、たとえ制御不能文でも、話し手の意志が介在すると変化前を表すことになる、ということである。

上記の２つの属性を併せ持つ事態は、制御不能の事態であることに変わりはないので、話し手はそれをコントロールすることはやはりできない。この点では、一般の制御不能文と同様である。しかし、この２つの属性を併せ持つ事態であるなら、話し手はそれが一体いつ起こるのか、すなわちその進み具合を確実に把握することができる。それにより、起こらないようにコントロールしよう、という意志を生じさせてしまうのである。

以上、“了”だけで変化前を表せる発話を観察することで、“了”だけで〈もうすぐ変化〉を表す場合でもやはり〈変化〉の操作が行われることを表す、ということを明らかにした。次節では、事態制御文における“吧”やゼロ形式と比較し、この“了”の操作をいっそう明らかにする。

4.2. 事態制御文の“了”

4.2.1. 事態制御文における“了”・“吧”・ゼロ形式

中国語の事態制御文でしばしば用いられている形式として、“了”以外に、“吧”やゼロ形式などがある。例えば、次の(17)がそうである。

(17) 睡觉｛吧／φ／了｝！（(私は／私たちは）寝よう！／（君は）寝なさい！）

では、事態制御文において、“了”と“吧”やゼロ形式とでは、どのような相違点があるのだろうか。それは、1)意志の固さ、2)時間的意味の有無、という２つの相違点だと思われる。まず１点目について、次の命令文で考えてみる。（＃は、当該文脈上での不適当を表す。以下同。）

(18)（車で逃走している交通違反者に対し、パトカーに乗っている警察官が拡声器で呼びかける命令文として）停车｛φ／了／＃吧｝！（車を停めろ！）

(18)のような状況では一般に、まず“停车！”のようにゼロ形式で呼び掛ける。それでも、交通違反者が車を停めない場合は、“停车了！停车了！”のように“了”で催促する。しかしいずれにしろ、“吧”は不適切である。それは、ゼロ形式や“了”では、車を停めることは絶対服従しなければいけない命令となるのに対し、“吧”を使うと、車を停めることに同意するように、警察官が交通違反者にお願いしているようなニュアンスが現れてしまうからである。

“吧”を使うのに相応しい命令文は、例えば(19a)(19b)がそうである。

(19) a. 老林：“你说吧！老二！”（「おまえ言ってくれ、な！」）
老陈：“你说吧！哥！”（「あんた言うてくれよ！ねえ兄貴！」）
刘麻子：“谁说不一样啊！”（「どちらさんが言っても同じことじゃないですか！」）（茶馆）（日本語訳は黎波訳『老舎珠玉』p. 47による。）

b. 王利发：“总管，您里边歇着吧！”（茶馆）（「総管さま、奥の方でおやすみください！」（黎波訳『老舎珠玉』p. 22））

(19a)では２人の話し手（林と陳）が話を切り出すのを躊躇しているニュアンスが強く感じられる。(19b)では話し手の優しさが感じられる。それは、“吧”が話し手の意志が固くないことを表すからである。そこで、命令文を

“吧”で述べると、話し手が提案し、聞き手の意思を伺いながら聞き手の行動を起こさせようとする勧誘に近いものとなり、聞き手の意思を尊重する命令文となるのである。これが、“吧”を用いて命令文を述べると「命令の語気をやわらげる」（刘月华ほか2001など）と、一般に言われている理由である。

一方、(19a)(19b)の“吧”をゼロ形式や“了”に置き換えると、話し手の押し付けがましさや忍耐力のなさが現れる。また、前掲の(18)でゼロ形式や“了”を使えば絶対命令となる。それは、事態制御文をゼロ形式や“了”で述べると、話し手の意志が固いことを表すことになるからである。

次に、２点目の時間性の有無について、次の意志文で考えてみる。

(20)（「もういいかい」→「まだだよ」→「もういいかい」→「もういいよ」→鬼は隠れているみんなに大声で叫んで）
我找｛了／＃φ／＃吧｝！（探すぞ！）

隠れん坊という遊びでは、みんなが隠れた後、「もういいかい？」に対して、「もういいよ」という返事が返ってくると探し始めることができる、というルールがある。そして、鬼が探し始める時に、「探すぞ」という言葉を隠れているみんなに大声で叫んでから探し始めるとする。こういう時には、ゼロ形式も“吧”も不自然で、“我找了！”のように“了”を用いなければならない(注7)。

それは、“了”で述べると、時間の推移と共に（「もういいよ」という返事が返ってくると共に）、事態（鬼が探すこと）の開始へと移行することを表すからである。つまり、この“了”は、“要～了”と同様に、〈開始への移行〉という時間的意味を表すのである。

それに対し、ゼロ形式や“吧”は〈開始への移行〉という時間的意味を表せない。ゼロ形式を使った場合は、「探す！」という話し手の決意しか述べていない。また、“吧”で述べると、話し手が探すことをためらっているように感じられる。例えば、あまりやる気のない鬼は、ため息をつきながら“哎，找吧。”（やれやれ、探すとするか。）のようにつぶやくかもしれない。

では、“了”と“吧”とゼロ形式とでこのような相違が生じる理由は、何だろうか。次の4.2.2節と4.2.3節では、この点について考えたい。

4.2.2. 開始への移行

この節では、〈開始への移行〉という時間的意味を表す原因をまず考えよ

う。

事態制御文を“了”で述べると〈開始への移行〉を表す。それは、なぜだろうか。それは、“了”の使用により、未来空間において〈変化〉のアスペクト操作が行われていることを示すこととなるからである。

前述のように、話し手の意志が介在する発話を、〈変化〉の操作を表す“了”を用いて述べることで、変化を引き起こそうとする話し手の〈意志〉が引き金となり、未来空間が構築され、その未来空間において事態が位置づけられる。それで、“了”が未来空間における事態の〈変化〉を表すこととなる。未来において必然的に変化する以上、事態はすでに時間軸に乗っており、今や開始点へと移行しつつあるということになるのである。

また、それらの事態は、発話空間ではまだ変化が起きていないため、未変化・未実現の事態ということになる。しかし、それは単なる一般の未変化・未実現の事態ではなく、もうすぐ変化が起こる、変化前（実現前）の事態である。

一方、ゼロ形式や“吧”が〈開始への移行〉を表さないのは、これらが〈変化〉の操作を示す形式ではないからである。そこで、話し手の意志が介在する発話をこれらの形式で述べても、未来空間における事態の変化を表さないのである。

4.2.3. 意志の固さ

次に、意志の固さを表す原因について考えたい。

“了”で述べると話し手の意志が固いニュアンスが現れるのは、なぜだろうか。それもやはり、この“了”が未来空間における〈変化〉を表しているからである。この“了”を用いて述べると、事態が開始されるのはもはや確実で不可避的だと認識されることになる。そうである以上、事態を実行させるか否かなどの話し手の迷いや逡巡のプロセスは、この段階ではすでに存在しないのである。

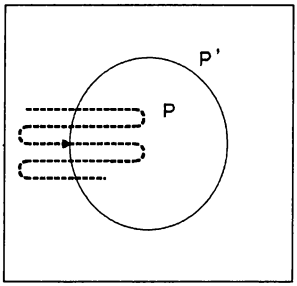
また、ゼロ形式で述べても、話し手の意志が固いニュアンスが現れる。それは、ゼロ形式がモダリティ的に無標形式であり、話し手の確実な心的態度を示す形式、すなわち現実性を示す形式だからである。そこで、ゼロ形式で述べると、話し手がその事態を事実として認識していることを表すことになり、話し手の意志が固い感じがするのである。

一方、“吧”で述べると、話し手の意志が固くないようなニュアンスが現

れる。それは、“吧”によって、話し手が発話空間で〈提案〉という操作を行うことを表すからである。この〈提案〉の操作とは、観念領域(P,P')において、逡巡という心的プロセスを辿り、その中継点として一旦Pに辿り着きつつもなお(P,P')において逡巡という心的プロセスを辿る、という心的操作である。ここでは、(21)を例として図2で説明する。

(21)（論文を書き続けるか寝るか迷いながら）我睡覚吧！（寝よう！）

図2. “吧”のスキーマ(schema)：



“睡覚”（寝ること）を“吧”で述べる場合、話し手は発話空間では次のような心的操作を行う。

すなわち、まず何らかのきっかけで、P領域（寝ること）とその補集合であるP'領域（寝ないこと）とが話し手の心的領域で喚起される。そして、話し手は例えば「論文の締め切りが迫っている」、「眠い」などの事情を思い起こしながら、P領域とP'領域とに対して、繰り返し比較・検証などの心的走査(mental scanning)を行い、これから自分が取るべき行動がどちらであるかを判断する。その心的走査の過程で、P領域に一旦到着する。それで、寝ること（P領域）を“吧”で述べるのである。

しかし、P領域は話し手の心的走査のプロセスにおける中継点にすぎず、終着点ではない。つまり、話し手は最終結論をP領域に定着させることなく、それ以後も続けて心的走査を行う。故に、“吧”で述べると、話し手の意志が固くないというニュアンスが現れるのである（木村・森山1992、森山2000も参照)。

この図において、反復曲線状の破線は話し手の心的走査の軌跡を示す。矢印が指しているP領域は、話し手の心的走査によって得た結論を示す。反復曲線状の破線が矢印の先も続いているのは、P領域に話し手がその最終結論を定着させているわけではないことを示している。劉綺紋（印刷中）で述べるように、“吧”のいかなる用法やニュアンスも、この〈提案〉の操作によって説明できる。〈提案〉の操作が、“吧”のスキーマ（共通性）だと言えるのである(注8)。

以上、“吧”やゼロ形式と比較することにより、“了”だけで〈もうすぐ変

化〉を表す場合、“了”によって示されるのは未来空間で〈変化〉の操作が行われたということである、ということがさらに明らかとなった。

4.3. “了”と“要～了”との相違

ここまでの考察から分かるように、変化前の事態を述べる場合、“要～了”でも、“了”だけでも、いずれも変化を起こそうとする欲望・意志によって開かれた未来空間において〈変化〉の操作が行われる。

但し、“了”だけを用いた場合と“要～了”を用いた場合とは、まったく同じだというわけではなく、以下の２点の相違が認められる。１点目は、発話タイプが異なるという点である。前述のように、変化前を表す場合、“了”は話し手の意志が介在する発話に限られる。それに対し、“要～了”は話し手の意志が介在しない発話でも用いられる。

２点目は、“要～了”よりも“了”だけの方が切迫性が高い、という点である。また、たとえ“快～了”のように、事態がもうすぐ起きることを表す“快”を用いたとしても、その切迫性はやはり“了”だけの場合よりは低い。例えば、次のような使い分けが考えられるだろう。

(22) a.（食事の１～２時間前）别吃太多零食了，｛要／快｝吃饭了。
（あまりおやつを食べ過ぎないで。もうすぐご飯だから。）
b.（食事の用意ができた時）别吃零食了，吃饭了。（おやつは食べないで。もうご飯だから。）

また、“要～了”の意味は、一般に「近い未来」としか記述されていない（刘月华ほか2001、『小学館中日辞典（第２版）』など）。しかし実は、(23)のように、“要～了”で「遠い未来」を表しても自然な表現となることがある（春木・劉2003）。しかし、“了”だけでは「遠い未来」を表しにくい(注9)。

(23)　（占い師が生まれたばかりの子供の運命を占って）
你的这个孩子，长大要当总统了。
（お子さんは大きくなったら大統領になりますよ。）
cf.　?你的这个孩子，长大当总统了。

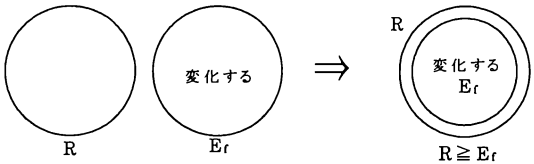
では、“要～了”と“了”とで上記の２点の相違が現れるのは、なぜだろうか。それはいずれも、“要～了”には未来空間を構築する引き金となるマーカー“要”があるのに対し、“了”だけではそのようなマーカーがない、ということに由来するのではないかと推測される。

すなわち、“了”だけの場合は、未来空間を構築する引き金となるマーカ

ーがない。であるから、その〈変化〉がいったい未来にあるかどうかは明示されない。“了”が、話し手の〈意志〉が介在する発話で用いられてはじめて、その〈変化〉が未来にあると解釈されることになる。そこで、この場合では、話し手の意志が介在する発話で用いなければならないのである。

そして、中国語では、発話者の意志が介在する発話であるか否かは、通常、文の形態によって区別することができず、文脈的な解釈によるものである。すなわち発話空間においては、その事態がすでに実現しているかどうかという判断や、話し手の表情・語調などで伝えなければならない。このことは、未来空間の構築が発話空間（の状況）に完全に依存しており、その独立性が非常に弱いということを意味している。そこで、“了”だけで変化前の解釈がされる場合、図３のような操作が行われることになると思われる。

図 3. “了”だけで〈もうすぐ変化〉を表す場合の操作



まず最初の段階で、話し手の意志を介在させることにより、未来空間E_fが臨時に構成される。しかし、その未来空間は発話空間Ｒに強く依存し、発話空間から切り離すことができない。それが、未来空間と発話空間とが重なることを強く促す動機付けとなる。そこで次の段階で、未来空間がそのまま発話空間へと重ね合わされることとなる。その結果、切迫性が非常に高くなるのである（春木1992:302参照）。

むろん、“要”がある場合でも、未来空間が構築されるのは、やはり話し手が発話空間において欲望(意志)を働かせた結果ではある。しかし“要”自身が未来空間を構築する引き金となるため、未来空間が一旦構築されると、発話空間に対する依存度が相対的に小さくなる。言い換えれば、そのような発話では未来空間の独立性が高く、発話空間と（完全に切り離せるというわけではないが）ある程度切り離すことができる、ということを意味する。その結果、意志が介在する発話のみにとどまらず、意志が介在しない発話でも用いられることとなるのである。また、その〈変化〉が未来にあることが明示的となるため、切迫性もそれほど高くないのである。

5. おわりに

“了”は、なぜ〈もうすぐ変化〉を表せるのか。それは、その“了”が、未来空間における〈変化〉を表すことができるからである。具体的には、“要～了”の場合は、行為者の欲望を表す“要”を用いることによって、また“了”だけの場合は、話し手の意志が介在する発話で用いることによって、変化を引き起こそうとする話し手の〈欲望〉・〈意志〉、つまり〈人間の行為者性（human agency)〉が未来空間を構築する引き金となる。それにより、発話空間を出発点としながらも、発話空間とは別の認識空間である未来空間が構築され、その未来空間に事態が位置づけられることになる。結果的に、“了”が示している〈変化〉というアスペクト操作は、その未来空間で行われることになる。これが、“了”で〈もうすぐ変化〉を表せる理由である。

ところで、否定命令文（禁止文）や否定意志文を“了”で述べると「中止」を表す、と一般に言われている。例えば、“别哭了！”や“我不哭了！”などがそうである。実は、これらの“了”は、変化を引き起こそうとする話し手の〈意志〉によって開かれた未来空間において〈変化〉の操作が行われることを示している点で、〈もうすぐ変化〉の“了”と共通している。

また、文末の“了”と同様に、動詞直後の“了”も変化前の事態を述べることがある。例えば“吃了饭！”や“别吃了那碗饭！”などの命令文がそうである。また日本語でも、「さあ、食べた！食べた！」というタ形を使った命令文がある。これらもやはり、変化を起こそうとする話し手の〈意志〉によって開かれた未来空間において、そのアスペクト操作〈変化〉が行われることを示しているという点で、中国語の文末の“了”と共通していると考えられる。

もちろん、動詞直後の“了”・日本語のタ形と、文末の“了”とでは相違点も存在する。“吃了饭！”“别吃了那碗饭！”はかなり強制力が強い命令文である。また、「さあ、食べた！食べた！」はぞんざいな命令文であるため、使う人間や場面が非常に限られる。一方、“吃饭了！”“别吃那碗饭了！”などの命令文は、必ずしも強制力が強いとは限らない。また、ぞんざいな感じもしないため、誰でも頻繁に使う。

このような相違が生じる理由は、おそらく動詞直後に置く“了”や日本語のタ形は、よりアスペクト機能に比重がかかっているのに対し、文末に置く“了”は、よりモダリティ機能に比重がかかっている、ということに由来す

ると推測されるのである（劉綺紋2004;印刷中)。

注

（1）「スキーマ(schema)」という用語は、Langacker(1987)に基づき、カテゴリーの成員に共通の抽象的な表象を表す。なお、いずれの“了”もただ1つの機能を持つとする研究に、张黎(2004)、王学群(2004)などがある。张黎(2004)は、“了”の共通性を「界変（限界変化)」とし、王学群(2004)は“了”の共通性を「達界（限界達成)」とし、いずれも春木･劉(2003)及び筆者の考え方と重なるところがあると言える。

（2）“要”には義務用法もある。義務も未来空間を構築する引き金となりうると思われる。例えば、英語のshallの未来用法は義務（owe）に由来すると言われている（Bybee & Pagliuca 1987)。

（3）“要”はwillと類似点を有するのに対し、“要～了”はbe going toと類似点を有すると言える。それは、willの未来が「欲望(desire)」に由来するのに対し、be going toの未来は「目的地に向かって行きつつある」ことに由来するからなのであると思われる（Bybee & Pagliuca 1987参照)。

（4）中国語の事態制御文・注意喚起文・制御不能文の形態は、基本的にいずれも平叙文と同じであり、その区別はその機能に基づいている。但し、“别”や“请”など、いくつかの例外もある。“别”は否定命令（禁止）や否定祈願を表すマーカーであり、“请”は丁寧な命令文を表すマーカーである。

（5）但し、その3人称の指示対象が発話空間に居合わせる場合、3人称主語を用いながらも命令文の力を持たせることが可能である。例えば、来客を追い払おうとする場合、直接その客に対して“你回去（了）！”（君は帰れ）と言わずに、自分の秘書などに“客人回去了！”（お客さんはお帰りだ！）と言う場合がそうである。

（6）“快～了”の認知的操作も基本的に同じことが言える。すなわち、〈変化〉を表す“了”と共起することで、話し手の〈意志〉を表す“快”（早く（～しろ))が未来空間を構築する引き金となるからだと思われる（劉綺紋印刷中)。

（7）日本では何も言わずに、黙ったまま探し始めるようであるが、私が子供の頃、台湾で隠れん坊の遊びをしていた時、“我找了！”と大声で叫んでから探し始めることが多かった。また、“我要找了！”と言う場合もあるが、いずれにせよ、この場合では、“了”を必要とする点に変わりはない。なお、両者の相違は、

“我找了！”の方がより切迫性が高い、という点である（4.3節）。

（8）例えば、“吧”の代表的用法の１つである推量用法も〈提案〉の操作が行われた結果としての意味効果だと考えられる。

(i) 那个人是女的｛?φ／吧｝，可是说不定其实是男的。（あの人は女の人｛?だ/だろう｝。でも本当は男の人なのかもしれない。）

「あの人が女の人であること」をゼロ形式で述べた場合、その逆の内容「でも本当は男の人なのかもしれない。」という文を後接させると不自然になる。それに対して、“吧”で述べた場合、その文を後接させても自然である。その原因はやはり、“吧”で述べると、その事態がまだ検討する余地のある中間報告にすぎなくなるからである。先行研究のうち、Li & Thompson(1981:307)では、“吧”の機能を〈同意を求めること〉として捉え、刘月华ほか(2001)では、“吧”の機能を〈語気をやわらげること〉としている。それらは、いずれも“吧”の〈提案〉の操作によって獲得された結果的な意味効果なのである。

（9）“了”と“要～了”との切迫性の差は、春木・劉(2003)に対する、東京大学の木村英樹先生の御指摘による。木村英樹先生に感謝申し上げたい。

参考文献

Austin, J. L. 1962. *How to do Things with Words*. Oxford: Clarendon.

Bybee, J. L. & W. Pagliuca. 1987. “The Evolution of Future Meaning.” A. G. Ramat *et al.* (eds) *Papers from the 7th International Conference on Historical Linguistics*: 109-122. Amsterdam: John Benjamins.

Bybee, J., R. Perkins, & W. Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar*. Chicago: The U. of Chicago Press.

Cutrer, L. M. 1994. *Time and Tense in Narratives and Everyday Language*. Ph. D. diss. University of California, San Diego.

ドルヌ，フランス・小林康夫2005.『日本語の森を歩いて』（東京：講談社）

Fauconnier, G. 1994[2] [1985]. *Mental Spaces*. Cambridge: Cambridge UP.

Fauconnier, G. 1997. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge UP.

春木仁孝1991.「Je ne savais pas que c'était comme ça.――再確認の半過去」（『フランス語フランス文学研究』59，76-88.）

春木仁孝1992.「時制・アスペクト・モダリティー　――フランス語の半過去の場合」（『言語文化研究』18，293-309.）

春木仁孝・劉綺紋2003.「語気助詞“了”のモダリティー機能」(『(言語文化共同研究プロジェクト2002)言語における時空をめぐって』大阪大学大学院言語文化研究科, 33-42.)

井元秀剛2005.「メンタルスペース理論に基づく英仏語の未来時制対照」(『(言語文化共同研究プロジェクト2004) 言語における時空をめぐってⅢ』大阪大学大学院言語文化研究科, 1-10.)

竟成 (主编) 2004.《汉语时体系统国际研讨会论文集》(上海：百家出版社)

木村英樹・森山卓郎1992.「聞き手情報配慮と文末形式——日中両語を対照して」(『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』東京：くろしお出版, 3-43.)

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar,* Vol.1. Stanford: Stanford UP.

Li, Ch. N., & S. A. Thompson. 1981. *Mandarin Chinese*. Berkeley: U. of California Press.

劉綺紋2004.『中国語のアスペクト体系の再構築に向けて』(大阪大学博士学位論文)

劉綺紋2005a.「程度表現における“了”」(『大阪大学言語文化学』14, 87-102.)

刘绮纹2005b.〈从认知的角度谈“太～了”的“了”〉(《知性与创造:中日学者的思考》北京:中国社会科学出版社)

劉綺紋 (印刷中)『中国語のアスペクトとモダリティ』(吹田：大阪大学出版会)

刘月华·潘文娱·故韡2001.《实用现代汉语语法 (增订本)》(北京：商务印书馆)

森山卓郎2000.「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」(『モダリティ』東京：岩波書店, 1-78.)

王学群2004.〈对“了”的一点私见〉(In竟成, 252-271.)

山梨正明1986.『(新英文法選書12) 発話行為』(東京：大修館書店)

张黎2004.〈“界变”论：关于现代汉语“了”及其相关现象〉(In竟成, 221-235.)

［附記］本稿の執筆前に大阪大学言語文化学会第28回大会で、初稿時に日本中国語学会第55回全国大会 (於筑波大学) で口頭発表を行った。発表後及び執筆中に、春木仁孝先生、沖田知子先生、井元秀剛先生、木村英樹先生、楊凱栄先生、上田恭寿様、岩男考哲様、岩田一成様、西端大輔様に貴重な御意見を賜った。深く感謝申し上げる。